

【事務局】

ただいまから、東京都北区おたがいさま地域創生会議の令和4年度第2回会議を開催いたします。

事務局でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

資料の確認をさせていただきます。事前に資料1から5を送付させていただいております。不足がございましたら、事務局へお申しつけください。よろしいでしょうか。

それでは、ここからの議題の進行は、会長にお願いいたします。

【会長】

皆様、こんにちは。どうも年度末のお忙しいところ、ご参集いただきまして、ありがとうございます。コロナもようやく先が見通せてきまして、地域の活動なりもできるだけ、また復活しているんじゃないかなというふうに思います。

今日は、終了が5時に完全撤収ということで伺っておりますので、できるだけスムーズに議案を検討していきたいというふうに思っております。

それでは、早速でございますが、今日の一つ目の議案でございます。高齢者あんしんセンターにおける活動状況についてということで、(1)の令和4年度地域ケア個別会議の開催状況について、事務局からご説明をお願いいたします。

【事務局】

お手持ちの資料3、令和4年度地域ケア個別会議の開催状況について、ご覧いただけますでしょうか。こちらのほうのご説明をさせていただきます。

地域ケア個別会議は、多職種の協働により個別ケースの支援の内容について、それと自立支援に資するケアマネジメントの支援やネットワークの構築について、最後に地域ケア会議についての把握、検討を行う会議です。こちらの個別会議で把握した地域課題については、高齢者あんしんセンターの日常の相談等の活動の中でも把握されている課題と併せて、日常生活圏域における共通課題として、解決に向けた検討を行うという流れになっています。

今、北区では、二つの地域ケア個別会議に取り組んでいます。

(1) 地域ケア個別会議、こちらが1事例について60分から90分近い時間を取って検討する会議です。民生委員さんとか町会・自治会の方といった地域住民の方も参加して検討を行っている事例もあります。こちらは各高齢者あんしんセンターで2事例以上取り組むこととしています。ですが、今年度に関しては、次に(2)でお話しいたし

ます介護予防のための地域ケア個別会議というものを、全高齢者あんしんセンターで今年度関与して試行しております。そのため、この両方を合わせて2事例以上を実施とさせていただきます。

二つ目の地域ケア個別会議ですが、(2) 介護予防のための地域ケア個別会議の試行を行っています。こちらは1事例45分で、多職種専門職で事例の検討を行うという内容にしています。2点目ですが、検討事例として取り上げているものは、要支援の認定がある人、要支援1か2、または事業対象者になっている方々を対象としています。今年度、計14事例を検討しました。

その下の下、助言者という方を位置づけています。こちらは専門職に参加をお願いいたしました。その職種としては、括弧に書いてあります主任ケアマネジャー、理学療法士、管理栄養士、訪問看護師をお願いをして実施をしています。今後についてなんですけれども、令和5年度の前半で本格実施に移行できるようにマニュアルの整備、それと高齢者あんしんセンターや関係団体への周知、ご協力を依頼したいと考えております。

以下、①以降については、その2種類の個別会議の両方を合わせた報告とさせていただきます。

①開催実績です。こちらは、2月末時点の開催状況です。令和4年度は2月までの間に28事例、検討を実施できました。昨年度が29事例ということなので、コロナ前の平常の開催状況に非常に近づいてきているなという状況です。

次のページをご覧ください。

②、こちらに検討した事例の世帯の状況と、対象者が認知症があるかないかといったことをお示ししております。取り上げられた事例の世帯状況としては、独居の方が19例で全体28例中19例なので、約7割を占めています。そのほか、高齢者のみの世帯を合わせると、ほぼ高齢者のみの方たちの支援を検討するというような内容になっております。その中で、独居と高齢者のみの世帯の方が全体で25例なので、9割を占めております。

③、会議への参加者数です。のべ142人の方にご参加をいただきました。

④、会議で出た課題と今後の方向性を記載してみました。幾つかご紹介したいと思います。

地域ケア個別会議と介護予防のための地域ケア個別会議、両方で共通するようなものを最初の表に挙げております。認知症や疾患、障害により意思表示が難しい方の支援を

どうしていくかというのは、複数の事例で話題になりました。

二つ目のところ、急階段、エレベーターがないような2階以上のフロアに居住している、機能低下によって外出機会が激減した事例という方も複数ありました。その検討の中では、どう重症化予防に取り組むかというのものもあるんですけども、地域とつながっていない方の場合、そしてそこが、例えば荒川寄り、北区でいえばハザードマップで浸水をするエリアに住んでいる方のような場合、どんなふうに避難をできるのか、そういった情報は取れるのかといったような地域のつながりが見えないねということも話題になりました。

3番目のところでは、独居高齢者と地域のコミュニティがなかなかつながらないねということが話題になりました。

以上のその3点に関しては、共通する課題だなというふうに感じています。この後、報告される地域包括ケア連絡会でのテーマにつながっていく内容になっているかと思えます。

ちなみに、以上に関して、どんな支援が検討されたかということを示し右側のほうに書いてあります。各事例で話し合われた支援のアイデアとしては、ご家族とか地域の関係者となかなかつながっていない状況があるので、区で配っている救急医療情報キットですとか、避難行動要支援者名簿の登録の周知とか、安心してお伝えできるツールをきっかけに何かつながっていったり、必要な支援につながるというきっかけづくりが必要かなというようなことが話題になりました。それと、実際に地域で活動しているコミュニティはあったりするんだけど、なかなかそこに入っていきることが難しいというような事例の特性も多くありましたので、ふらっと寄れる、気軽に立ち寄れる場があるといいなという場づくりに関して話題になりました。それと、実際に活動している地域の情報というのが、対象者の方々にどうやったら届けられるだろうかという、情報をお届けする、行き届くような体制づくりということも話題になりました。

以上のようなことが、主に共通することとして、この場では報告させていただきます。次のページをお願いします。

次のページには、介護予防のための地域ケア個別会議から上がった課題、今後の方向性というのを掲載してみました。その中で、非常に話題に上がったのが、若年という言葉おかしいんですけども、若年高齢者、まだ高齢者になったばかりの70歳になるまでくらいの間的事例に関して話題になりました。

少し読み上げてみます。70歳以下の高齢者で、一つには介護保険サービスはもっと高齢者が使うものというようなイメージが強くて、自分がそれを利用する、そういった場に通うことに抵抗があるなという特性が挙げられました。

そして、2番目のところ。そのような若年の高齢者の同年代の方々と交流できる場がどこかにあるだろうか、もしかしたらないかもねというようなことが話題になったのと、あと、その年代の方ですと、一旦は受傷して機能が低下をしているけれども、やっぱりお仕事をまた何かしてみたい、お仕事に戻りたいという希望もお持ちの方が共通してあったなと感じました。

3番目です。その仕事ですとか社会の活動とつながっていたいという思いは非常に強くお持ちだなという事例が多かったです。例えば、どういうふうにつながっているのかというところがなかなか見えないねというのが話題になりました。

そこから、右側の今後の方向性というところでは、介護保険サービス以外の参加できる場の発掘であったり、創出が必要なのかなと。趣味活動等の場へのつながりが必要なのかなと。それと、自分の体のことでいうと、介護予防のために体力、筋力維持につながるような運動習慣、食習慣の定着への支援が必要かなということが話題になりましたので、ご報告いたします。

ちなみ、ちょっと居住環境のところでは毎回話題に課題だねというふうに上がるものとして、一旦、前のページに戻っていただきまして、表の一番下なんですけれども、オートロック式のマンションに居住している方について、例えばごみの戸別回収といった支援に登録をしたくても、その場合、オートロックで入り口でインターホンを押してご本人がきちんとその時間に応答して、オートロックを解除していただけないとなかなか玄関先まで行けないとか、そんなことが増えているんじゃないかなというような話題がありましたので、なかなかちょっと解決策はないんですけれども、共通するかなと思って記載をしております。

以上が、地域ケア個別会議の状況の報告でした。会議に関わっている専門職、高齢者あんしんセンターの職員、ケアマネジャーさん、そして民生委員さんや町会・自治会の方などが参加することで1人の職員としてはなかなか気づかないような対象者の姿が見えてくることが多いなというふうに感じています。関わるそれぞれが、それぞれの視点を生かしていけることでスキルアップができて、それが対象者の方の介護予防、重病化防止につながっていけばいいなというふうに感じております。

以上、報告でした。

【会長】

はい。ありがとうございました。それでは、ただいまの地域ケア個別会議の開催状況についてのご説明に関しまして、ご意見、ご質問、いかがでしょうか。

じゃあ、皆さんの意見が出る前に。介護予防のための地域ケア個別会議のところで、特に70歳以下の方がまだまだ年齢といいますか、高齢ではないという意識で何かちょっと独自にできることはないのかといった、ご意見をいただいたということでお伺いしていたんですが。この辺り、恐らく多くの方が、いわゆるまだまだ、例えば働くとか、やはり最近では、完全な雇用ではなくても就労的活動とか有償の活動、こういったものもまだまだ特に若い若年の高齢の方なんかですと志向があるんじゃないかなというようなことが察せられるかと思います。そういう意味では、北区の場合、「きらりあ北」さんなんかも非常にいろんな窓口で働く場とか採用というものもあっせんされていらっしゃるし、もちろんシルバー人材さんできっちり、そういった委託といいますかね、請負のことをやられる方もいらっしゃるかと思うんですが、特にシルバーさんの年齢よりももう少し若めの方になると、「きらりあ」さんの活用というのも重要なんじゃないかなと思うんですね。その辺り、多分、就労的活動支援コーディネーターの力量といいますか、活動というのが非常に左右してくるかなというふうには思いますが。この辺りも、特に現場からもやっぱりそういう声が出てきていますので、いかにやれる作業とかやりたい作業というものを、実際、企業さんとマッチングしたりということがこれからやっぱり重要になってくるかと思うんですね。それが一つの大きな今後の動きにはなるんじゃないかと。

確かに今年度、昨年度ぐらいから我々もいろんな好事例とか、そういったものを全国の好事例なんかを検討会なんかでも勉強させてもらっているんですけども、一番、多分、都内ですと、八王子市さんなんかは結構そういうシニアの力、そういう就労的活動を支援しようというような企業さんをたくさん集めて、マッチングをするというような仕組みなんかもつくっておられまして、結構、目からうろこのいろんな作業とか業種が集まってきたりというようなこともあると思いますので、多分そういった仕掛けを北区ほど働く場というのがたくさんあるところを考えると、八王子なんかよりもっと多様な業種の方々がこういう作業なら高齢の方にもやってもらいたいとか、こういう作業は切り分けられるんじゃないかみたいなことを、結構やっぱり現場のアイデアというの

は多々行き交っているようですので、できるだけいろんな地域のモデルなんかを勉強していただくとともに、「きらりあ」と一緒にちょっとそういった若年の方対策の受皿をたくさん創っていただくのは、非常にいいんじゃないかなというふうに、ちょっとそんなふうに感じました次第でございます。

せっかくの機会ですので、もし委員の皆様から何かございましたら、いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

【委員】

よろしく申し上げます。

自分のところは地域活動なので、地域活動についてちょっとお伝えしたいなと思うんですけども、やっぱり地域活動として僕ら今ベゴマをやっているので、高齢者の方にもぜひご参加いただきたいなという気持ちは常にあるんですけども、どうしてもお子様連れの親子での参加というのが割と普通にあるんですけども、通りすがりでご高齢の方がピンポイントで参加されることはあっても継続的なということになると、やっぱりかなり限られた感じになるんですね。そういうところをうまく自治会とかとつながっていったらな、なんて思ったりもして活動したこともあったんですが、なかなか自治会の方々というのいろいろな方々がいらっしゃるので、とても寛容な方もいれば、やっぱりちょっとこの輪には入ってきてほしくないみたいな人もなかなかいらっしゃるので、難しく、活動と自治会さんというところの垣根というのがなかなか下がっていかないところは、ちょっと体感としてあるんですね。

あとは、社協の活動団体としてやっていますので、活動団体の紹介のホームページとかもあったりして、紹介はしていただいて冊子とかも毎年作っていただいて紹介はしていただいているんですけども、そこからやっぱりご高齢の方が、じゃあ問い合わせきてわざわざ参加しに来るとのことというのは、なかなかやっぱりまれなケースというか、ほぼないので、今ある既存のものが駄目だというわけじゃなくて、その既存にあるものが実際に本当に生かされるためにどうしたらいいのかというところまで落とし込まないと、このネットワークというのは多分長年ずっと課題には上がってきたけれども、解決は絶対されてこなかったことだと思うので。多分、そのネットワークが本当に構築されると、僕らの活動ももっと地域の方々に還元されるように生きてくるんじゃないかなと思っているので、ぜひそこを区のほうとか社協のほうとかと連携して、やっていただけたらありがたいなと思っています。

【会長】

ありがとうございます、非常に現場のご意見いただきまして。これは以前、ベーゴマの活動をご紹介いただきまして、非常に興味深く拝していたんですが。

ちょっと1点ご質問ですが、この活動は何か決まった場所なり時間で、いつもここに行けば必ずベーゴマやっているよみたいなところで巡り合えるものなのか。ちょっとまだまだイベント的なものなんですか。どっちでございますでしょうか。

【委員】

そうですね、定期的に活動を同じ場所でやっております。やっている場所は、ずっと10年近くやっているの、最初の頃は公園で放課後毎日やっていたんですよ、昔は。それから、ちょっと子どもが生まれたりとかしたことがあってから、月に1回、2回になり、今は月に2回、週末、小学校とか時期によって借りれないので公園になったりすることもあるんですが、基本的には決まった時間、決まった場所でやるようにしております。

【会長】

今のお話し聞いていまして、多様な通いの場といいますかね。多様な居場所の一つのパターンのようになるんじゃないかなというふうにお見受けしたんですけれども。確かに、こういう昔遊び的なものなんかも、イベントではなかなかちょっと定着しにくいんですけれども、都内なんかでも、いわゆる公園の一角でプレイパークと言いまして、子どもさん向けのもう泥んこ遊びができるような場所を開放しているような公園も、特に世田谷のほうなんかには何か所かあるんですけども、そういったところで必ずベーゴマとか釘刺しとか、そういったコーナーがあって、そこへ行くと必ず子どもも親子連れも、そこには必ず高齢の方がいて、毎週そこに通ってこられるような方もいらっしゃるんですね。多分、市民の人もそこへ行けば必ずやっているなというのも分かりますし、一見さんもふらっと寄ったらやっていくみたいな形で。多分、いかに自然体で目に触れるような場所で活動ができるかなというところも大事なんじゃないかなと思いました。多分同じような取組がこの間、いろんな調査用の事例なんかをしていましたら、紙飛行機を公園で飛ばすような自然発生的な集まりがあって、そこなんかはやっぱりいろんな世代の人が来て、そこに行けば必ず紙飛行機飛ばしているなというところがあるらしいんですね。そういうのはやっぱり一つの居場所であり、通いの場として自然発生的な通いの場として、大事な地域資源というふうに地元の包括さんなんかは捉えていらっしゃるみ

たいです。多分、うまく、ちょっと発想を高齢者目線で考えると、今のベーゴマをやるような場所なんかも特に男性の高齢者の通いの場になるんじゃないかなと思いましたが、ちょっとやっぱり発想を広く持つということで大事なご提案をいただいたんじゃないかなと思いました。ありがとうございます。

それでは、ちょっと議案もまだまだありますので、次に進ませていただきたいと思います。

次は、（２）令和４年度３圏域地域包括ケア連絡会議の報告で、これは社会福祉協議会の委員からご説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

【委員】

では、お手元の資料４というところを、まず見ていただくと。

今、地域包括ケアの個別会議の報告があったところなんですが、これとまた別に北区の三つの圏域、大きな中圏域に分かれて、地域包括ケア連絡会をやって共通の課題ですとか取組について、毎年行っているものです。

今、個別ケア会議のところでもいろんな課題が出ていたんですけども、特にこの３年間は、やっぱり新型コロナウイルスの影響で様々な人たちのつながりそのものが影響を受ける、ダメージを受けてしまったということで、この３圏域ともやはり地域のつながりをまず回復しないことには、その上の様々な活動というのは回復されないというようなことの中で、もう一度地域の中のつながりの大切さということを見直したいというようなことをテーマにされながら実施をしているところです。

王子と赤羽と滝野川ですが、王子は１０月に赤羽は１２月、滝野川は１１月にそれぞれテーマを持って、この地域包括ケア連絡会を実施をしておりますので、詳しくこれからそれぞれの圏域の担当者からご報告をしたいと思うんですが、一番最初が王子地区の十条台の高齢者あんしんセンターからご報告をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【十条台高齢者あんしんセンター】

皆様、こんにちは。十条台高齢者あんしんセンターです。よろしくお願いします。

着座にて失礼させていただきます。

これより、令和４年度王子圏域地域包括ケア連絡会の報告をさせていただきます。よろしくお願いします。

まず、これまでの王子圏域地域包括ケア連絡会のテーマについてです。

令和2年度の「地域のつながりの大切さ P a r t I」では、コロナ禍でも高齢者が地域とつながることの大切さを確認することができました。

令和3年度の「地域のつながりの大切さ P a r t II」では、「～小さな活動から元気を～」というサブタイトルをつけさせていただきました。コロナ禍でさらに困難状況が続き、活動が制限される中で、どのようにして町会やシニアクラブなどの団体がコロナを乗り越えて活動を続けてきたかを紹介させていただき、意見交換会を行いました。その中で、活動をやめないというメンバーの意思や触れ合いを大切にしたいという思いがあることが分かり、地域への人々のつながりの大切さが分かるからこそ、その活動を続けたいんだという熱意を改めて感じることができました。

その一方で、独りで誰とも接点を持たずに生活している高齢者もいます。独りでいることを好む人も当然います。元気で暮らしている間は問題にならないのですが、年を重ねて何か問題が起きたときのことを考えると、完全に孤立してしまうことは心配です。孤立を選ぶ理由は様々ですが、その人のことを気にかけてくれる、または心配してくれる人が地域に1人でもいれば、その人は少しは安心できるのではないかと思います。どのようにすれば、高齢者が孤立することなく、住み慣れた地域で暮らし続けることができるか。日々の生活や活動の中でどのように人とつながるのか。孤立しそうな方をどのように支えるか。

孤立について考え、つながりの大切さの意味を考える会とするため、令和4年度のテーマを「地域のつながりの大切さ P a r t III～孤立をささえるコツ～」としました。

開催日は令和5年となっておりますが、正しくは令和4年10月19日の誤りです。申し訳ございません。会場は、北とぴあ飛鳥ホールです。当日は、町会・自治会、民生委員の方、シニアクラブや自主グループなども団体の方々、34名の方に参加していただきました。

内容は、まず孤立化防止の動画を見て、グループワークを行い、次に事例を紹介し、グループワークを行いました。なお、当日は、八つのグループに分かれました。

まず、一番最初の孤立化防止の動画上映です。当事者が孤立することなく、周りから必要な支援を受けながら安心して暮らしていけるよう、地域における声かけや見守りなどの支え合い活動の大切さを訴える動画で、千葉県プロジェクトである「ちばSSKプロジェクト」で作られています。

千葉県では高齢者が孤立することなく、必要な支援を受けながら安心して暮らせるよ

う、地域で声かけや見守りなどの支え合い活動を実践することが重要と考え、啓発事業などを行っているということです。このプロジェクトが「ちばSSKプロジェクト」です。最初のSは「しない」、次のSが「させない」、Kが「孤立化」の頭文字だそうです。

動画の粗筋ですが、妻に先立たれて、親族や友人との関わりも趣味もない高齢男性が自宅で倒れているところを隣人が発見し、事なきを得ます。それをきっかけに親族や地域の人々の絆を取り戻し、孤立化から脱却するという内容です。

上映後に各グループで動画を見ての感想をお話ししていただきました。感想としましては、ごみ捨てなど挨拶、声かけから始まる。グループに誘ってもらえるとよい。声をかけてくれる人がいるとやってみようと思う。隣人や家族のつながりも大事に思うなど様々な意見が出ました。

次に、事例を三つ紹介しました。一つ目は、自主グループの立ち上げについて。二つ目は、人付き合いが苦手な方が地域に溶け込んでいく様子。三つ目は、独り暮らしの認知症Aさんが介護保険のサービスを拒否し、民生委員や近所の方の見守りにより、生活をしている事例です。

紹介後のグループワークでは、この三つ目のAさんの事例について意見交換をしました。各グループでAさんの困り事や自分なら何ができるか、地域で支えるにはどうしたらよいかについて、意見交換をしました。出てきた意見としましては、拒否されても諦めずに声かけをしていくこと。そっと見守る。仲よくなっていくこと。小さな気づきが必要などたくさんの貴重な意見がありました。

今回も連絡会についてのアンケートを行い、その中から感想や意見を抜粋しました。感想はいろいろな分野の方のお話が参考になった。地域包括支援センターの重要性の認識が高まった。動画、事例紹介、グループワークなどの内容がよかったなどのご意見をいただきました。

また、一方で、改善点もご指摘いただきました。全部の班の発表を聞きたかった。時間が短かったなどです。これらの改善点は今後の連絡会に活かしてまいります。

最後に、生活支援コーディネーターとしてです。私たちは今回の連絡会の開催を通じて地域のつながりの大切さについて、改めて意義のあることだと感じました。誰ともかわらずに暮らし続ける高齢者もいますが、挨拶などの声かけや高齢者を見守る地域の協力、そして拒否をされても諦めない熱い思いがあるからこそ、住み慣れた地域の中で

高齢者が暮らし続けることができるのではないかと思います。今回のような事例を通して地域の皆様と話し合う機会を設けることで、高齢者が安心して暮らせるまちづくりを各地域で目指してまいりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

【委員】

ありがとうございました。3地区あれでしょうか、ちょっと続けて報告させていただいてよろしいですか。

【会長】

そうですね、はい。お願いいたします。

【委員】

では、引き続き、赤羽圏域のほうから浮間高齢者あんしんセンターにご報告させていただきます。

【浮間高齢者あんしんセンター】

浮間高齢者あんしんセンターです。どうぞよろしくお願いいたします。

着座にて失礼いたします。

浮間高齢者あんしんセンター、令和4年度赤羽圏域地域包括ケア連絡会は12月10日土曜日に開催しております。その前に、まずは今年度、赤羽圏域地域包括ケア連絡会開催までの赤羽圏域の活動について、ご説明させていただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

赤羽圏域では、東洋大学ライフデザイン学部の移転に伴いまして、担い手づくり、多世代交流の視点から学生と地域の活動団体をつなぐため、昨年度から活動しております。昨年度の地域包括ケア連絡会では、お見合い大作戦といたしまして、学生さんと団体に参加いただきまして、学生が地域活動に積極的に参加できるような、そういった結びつきをつくろうと努力いたしました。ただ、継続的な結びつきには至っていない状況です。

その前年度の反省を生かしまして、今年度、私たちお互いをもっと知ることが必要ではないかという考えから、まずは、赤羽圏域の生活支援コーディネーターが東洋大学白山キャンパス、赤羽台キャンパスのほうにお伺いいたしまして、地域包括支援センターの紹介や地域活動についてのプレゼンテーションを行いました。関心を持っていただいた学生とはオンラインで意見交換をいたしました。

そこで、分かったことなんですけれども、学生の本音といたしまして、初めてそうい

ったボランティアに参加するというのは不安がある。参加したことのある学生の声が聞けたらいいな。詳しい情報が知りたいので、活動内容が分かるチラシや動画などがあるとよい。電話することには抵抗がある、簡単にアクセスできればいいなというような、そういった意見が聞かれました。

そこで、私たちも考えまして、学生の意見を基に学生とつながりやすくなるためということでLINEグループ「赤羽つながろうプロジェクトチーム」を開設しました。また、学生が地域活動の参加にアクセスしやすいように活動紹介シート、赤羽圏域での地域活動を一覧にしたものを作成いたしました。

活動紹介シート、こちらのほうがそれになるんですが、活動場所や曜日、内容のほかにその活動にどんな人が関わっているのか、活動するとどんなメリットがあるかなども表記させていただいております。また、活動内容を具体的にイメージできるように活動紹介のチラシや動画、写真などをURLから見られるようにいたしました。連絡先も電話では抵抗があるということなので、メールアドレスのほか、ツイッターにつながるような工夫もしております。活動紹介シートは、LINEグループで共有し、東洋大学の先生にお願いしまして大学構内に掲示したり、先生からの紹介というようなことを試みしております。

それで、12月10日土曜日、10時から11時半、赤羽会館4階大ホールのほうで私どもの地域包括ケア連絡会を開催させていただいております。「地域のつながりを広げよう～知ることから始まる縁～」というサブタイトルで開催させていただきました。赤羽圏域の生活支援コーディネーターは、学生の考えに触れることができましたけれども、地域で活動している人たちにもそれを知ってもらいたい。そういったことでお互いを知るというところで開催させていただいております。

同日は、参加団体13団体20名、学生13名、あと、コメントいただく先生のほうをお一人ご参加いただきまして、6グループに分かれてグループワークを開催しております。

特技一覧と書いてあるものなんですけれども、これはグループワークで皆さんにも提示させていただいている内容なんですけれども、それまで学生さんとのやり取りの中で得られた情報として、学生が「私、これ得意なんですよ」という、それが地域活動に生かせるんじゃないかということでしたらいただいた情報をまとめたものになります。こちらを配付しまして、学生と地域で活動している皆さんのほうに、学生の力をどう地域活動に

生かせるか。どのようなつながり方ができるといいか。そういったことに基づいて意見交換をしていただきました。

グループワークから出た意見です。私たちは、学生さんに地域の活動に参加してもらいたいという、そういった視点だけで考えていたなというところがあったんですが、やはり知らないところに参加するという事は、不安が大きいということとも言えると思います。グループワークで出た意見としまして、学生のボランティア参加だけを求めるのではなくて、お互いをもっと知るために地域のイベントなどに一緒に参加して取り組んでいく。それで近い関係になっていく。そういったことが必要ではないかという意見が出ました。補足ではありますけれども、私ども、赤羽圏域生活支援コーディネーターのほうで2月に東洋大学の学生寮のほうを見学させていただいて、まずはちょっと学生さんの生活というところを見させていただきました。

大学の先生のほうからもお言葉をいただいております。学生の地域活動への参加に対して継続的な参加は求めないなど、気軽さや自由さがポイントになるということです。その上で学生に対しては何を学びたいかなど目的意識を持ってもらうこと。地域の人には人生の先輩として学生を導いてほしい。そういったお話がございました。

そこから、今回の連絡会から見えてきた今後の課題というところですね。今後の課題として、学生と地域の人と一緒に参加できるイベントを開催し、お互いをもっと近い関係になるよう努める。学生に情報を伝えやすくするために、いろいろ手段を講じてきたんですけれども、そのブラッシュアップをしていく。人材バンクなど継続的に学生が地域活動に参加できるような仕組みが必要ではないかと、そういった課題が出てまいりました。学生さんはいつまでも同じ大学にとどまることはございませんので、やはり年がたって卒業してということであると、どんどん入れ替わっていく。そういった学生さんたちと継続的につながっていくには、どうしたらいいかというところを深く考えていかなければいけないかなと思っております。

最後に、補足なんですけど、その後、大学の先生のほうと、最後、また話合いの場がございまして、先生からいただいたお言葉でちょっと印象的だったのが、学生さんのほうではやはり8割が学業であると、1割はバイトであると、そのほかの1割が趣味活動であったり何かほかのものであるということで、その中に地域活動やボランティアもあるんじゃないか。要するに関心がないわけではないんだけど、優先順位としてはやっぱりちょっと後者のほうになっていくのかなというお話をいただきましたので、そののと

ころを、学生さんを取り込むということ自体がちょっと難しいんだなというところを改めて感じたところではあるんですけども、今年度のところもそのところ、どうしたら学生さんが地域に参加いただけるかというところを考えながら、また活動していきたいと思っております。

以上です。

【委員】

ありがとうございます。

では、引き続き、滝野川圏域は新町光陽苑からご報告させていただきます。

【新町光陽苑高齢者あんしんセンター】

よろしく願いいたします。座らせていただきます。失礼します。

滝野川圏域地域包括ケア連絡会は、昨年11月9日に北とびあで開催いたしました。去年と一昨年はコロナ禍でのネットワークづくりということで開催しましたが、今年は「その人らしい地域とのつながりを見つけよう」というテーマで開催しております。

このテーマにした経緯をしましては、まず滝野川圏域の各あんしんセンターで開催しました地域個別会議からそれぞれ課題を抽出しました。そして、その課題について確認し合ったところ、地域課題の一つとして、今、介護保険などサービスの利用を問わず、お近くに軽く行けるような交流の場所がないということ、そして地域とのつながりが薄いということが大きく浮かび上がってきました。地域社会の実現に向けて、全ての住民が役割を持って支え合ったり、自分らしく活躍できる地域コミュニティをどのように育てていけばいいのか。今回のテーマにはそういう意味が含まれております。

設定内容につきましては、まず地域で自主的に見守り活動をしている方々、2事例を紹介させていただいております。その後、グループに分かれまして地域の見守りなど自分たちができそうなつながりのヒントや、気づき、地域のことを知るきっかけづくりを目的として意見交換を行っております。参加団体はフォーマル、インフォーマル団体の方々に来ていただきまして、シニアクラブ、町会・自治会、自主グループ、薬局、手話の会、障害施設、介護保険関係者等、34名の方々に参加していただいております。インフォーマルの団体の方には実際に活動されている方とか、これから活動を考えている、のびしろのある参加者などをバランスを考慮させてお呼びいたしました。

こちらが事例発表では、お弁当を作って地域の方に配っている方の写真が映っております。配った際に地域の方の話を聞いたりとか、何かあればあんしんセンターに報告し

てくださったり、とても頼もしい方です。

事例発表、もう一つのところでは、こちらは商店街の一角にある乾物屋さんと薬局の様子です。店先に一つの椅子を出したりとか、あとは店内に椅子を設置することで、地域の方が気軽に話したり交流できるようになっております。

グループワークでは、こんなことをしてみたいなとか、あったらいいなと思うこと、それはどんなふうにつながりたいですかとか、どうしたらつながることができますかというような内容で話し合いました。

話し合い後は各グループごとに発表していただいております。ここでは地域の見守りやつながりについて様々な案がありましたが、幾つか紹介させていただきます。日中ぶらっと来れて100円ぐらいでお茶が飲めるようなところがもっと地域にあるといいなとか、公園や施設のような場所が開放できるといい。また、認知症の症状があっても作業をしたり、その人に合った仕事ができるなど、認知症の方が役割を担えるような場所づくりを提案されていまして。多世代交流という面では、子ども食堂の中に高齢者の方が関わればいいのではないかというような意見も声も上がっております。今回の事例のように、また道路横に椅子を設置したらどうかという案もありましたが、これは既に今回の連絡会の後、椅子を寄与したいというような声も出ております。

終了後はアンケートを採りまして、今後包括ケア連絡会で取り上げてほしいテーマを伺っております。

そのアンケート結果も含めたまとめです。今回は様々な分野で活躍されている方々に参加していただきまして、グループワークでは私たち含めたお互いの取組を知るよい機会になったと感じております。ふだんから地域とのつながりを大切にしている方々がたくさんいらっしゃるということも分かりました。課題としましては、認知症になっても働ける場所づくりや耳の障害のある方に欠かせない手話の普及等も出てまいりました。また、交流の場として何かに参加してつくりたいけれども、公園や施設のような場所が開放できるとよいのだが、などのつながりもどこで求めたらいいか。場所の問題も大きな課題となっております。

終了後には、今回の「連絡会のまとめ報告書」を冊子にいたしまして、参加者に配付しております。

最後になりましたが、住み慣れた地域でいつまでも安心して暮らせる地域包括ケアを推進していくため、どのようにしたらその人らしい地域とのつながりを広げることがで

きるのか。今回の内容を今後に生かしまして、地域の方々と一緒に作り上げていければと思っております。

滝野川圏域から以上です。ご清聴ありがとうございました。

【会長】

ありがとうございました。では、3圏域からご報告いただきましたが、委員の皆様、ご自由にご質問、ご意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

【委員】

ありがとうございました。赤羽の興味あったのは学生さんたち、大学生の方々との交流の件なんですけれども、大学のほうで将来はどうなるか分かりませんが、学生の単位として認定するようなシステムを連絡会はなさっていらっしゃいますかね。その辺り、どうですか。積極的にやっぱりオープンで時間を取って日中とかも行けるというのをつくるというのは、大学のほうもそういうところを創ってもらいと、必修フィールドワークの一つでしょうから、それで論文書いても・・・なので、そういう考え方はどうでしょう、どうかなと思ってちょっと思いました。いかがでしょうか。

【会長】

非常にいいご提案だと思いますが、この辺のシステムは大学とやり取りされているかという情報はありますでしょうか。

委員、どうぞ。

【委員】

ちょっと今、全体的な話なんですけど、今大体、大学のほうから来る話がゼミ単位とか授業単位で紹介される形で、いわゆる学生が自由参加で来るというよりは、先生のほうから授業の一環で言われて来ているみたいな形なので、来たからそれで単位認定という話にはなっていないんですけれども、多くは授業絡み、ゼミ絡みで来ていただいているということなので。これはこれで、先生がおっしゃるように、それなりに学生にとってもメリットがあるというか、そういった活動の一環として関わるができるというのはあるんですが、これから広げてくるということになると、ゼミとか授業じゃない部分の学生も自由に参加できながら、先生がおっしゃるような、何かしらそれが認められるようなことになるということなんかはあるのかもしれないので。そこの辺りは実はこの4月から今、赤羽台にある東洋大学のライフデザイン学部にも、白山校舎のほうから社会福祉学科も来て合流して、東洋大学の福祉系の学部が全部赤羽台のキャンパス

に集合する形になるので、どういうふうな形の連携ができるのかとか。あと、もうちょっと違う視点でいうと、ボランティアセンターといいますか、今、大学の中にボランティアセンターが国内でも100か所以上あるんですけども、東洋大学にも白山キャンパスにはあったんですが、赤羽台キャンパスにはなかったのが、分室のようなものを週2回、月2回ぐらい分室みたいな形で、こちらのほうでも学生のボランティア活動をサポートするような仕組みも白山のほうからこちらに来るみたいなことがあるみたいなので。いろいろなパターンで学生が地域に関われるようなものが推進できるかなと思うのと。あと、東洋だけではないので、いろいろな学校が今、関わりを持ってはいるんですけども、そこもどちらかというところ、ゼミとか授業単位みたいなところが今は多いので、先生おっしゃるように、学生が全くそのことで学校を休むとか授業を休むとかという形じゃないのが多いのが実態かなと思っています。

【会長】

ありがとうございます。ほかは、いかがでしょうか。

この赤羽の取組は、非常に興味深く私も拝見していたんですけども、やっぱり委員のおっしゃるように学生さんにとってのインセンティブといいますかね、メリットがやっぱり大事だと思うんですね。一つは、やっぱり完全に無償ボランティアでいくのか、やっぱり高齢者が就労的活動なら学生さんもやっぱり就労的活動といいますかね、やっぱり有償の部分があってもいいんじゃないかなというふうには考えているところです。

やっぱり、その中で今回ゼミ単位とか、そういう数ではかなり10人、20人の学生さんが一気に来られてお見合いしたりとか、その後続くということもあると思うんですけども、多分その後、継続して本気で関わってくれる学生さんというところ、その中のもう本当に1人、2人、3人かもしれないと思うんですね。やっぱりこの数でアプローチするのと、質でアプローチといいますか、少数精鋭に期待する部分とやっぱり両方重要かなというふうに思います。やっぱり最終的に頼りになるというか、一緒に考えて一緒に動いてくれるというのは、もう本当にその1人、2人、3人ぐらいのことになるかなと思うんですけども、もうそういった方々をどれだけこの活動の中で見初めて、逆にその人にはいろんなインセンティブも与えたり、いろんな裁量も与えてやっていけるかというところは大きなポイントかなと思うんですね。

最近、やっぱりZ世代とよく言われているように、我々が学生だったときと違ってかなり多様な価値観といいますか、単に定休どおりのサラリーマンになってお金を稼ぐと

いうよりも、もっと値打ちのあることをしたいとか、社会貢献性のあるものを目指したいという学生さんが非常に多いというふうが増えておりますので、恐らく探せばそういうちょっと金の卵もいらっしゃるんじゃないかなと思います。確かにやっぱりいろんな全国の事例なんかを見ておりましたが、地域おこしとかいろんなのをやるときに、高齢者と役所、あるいは公的な立場の方だけですと、なかなかそれはうまく走り出すことがなくて、やっぱり学生さんとか学生上がりの方がワンクッション入って、中間支援的な立場で入ってうまくいくというところが多いかと思うんですね。例えば、ふるさと納税もいろんな返礼品なんかも、いろんなアイデアがどんどん出てきているみたいですが、ああいうのも田舎であれ都会であれ、学生さんでその一握りの人がアイデアを出して、それを実際汗かくのは高齢者で、つないで売るのはその若い人みたいな形でやっている部分が多いというふうによく聞くんですね。

ですので、多分、高齢者だけじゃなくて学生さんとの関わりにおいても、ちょっとそういうインセンティブが働く、就労的活動ですとか、一緒に新しいものを作り出すみたいところで少数精鋭の人をどれだけ最後囲い込めるかなというところを、ちょっと皆さん、アンテナを張って、この人いけるんじゃないかとみたいところで目を光らせながら、キャッチしていただくというのも大事なんじゃないかなというふうに思いまして、そういうちょっとご助言をさせていただきました。ありがとうございます。

ほか、いかがでしょうか。三つの事例、非常にユニークな事例いただきましたが、よろしいでしょうか。

じゃあ、委員、お願いします。

【委員】

すみません。滝野川包括ケア連絡会の日中ぷらっと来れて100円くらいでお茶が飲めるとか、施設のような開放できる場所がどこかないかということなんですけれども、これと、あとその下の認知症の方の作業で仕事になるようなことがないかみたいなのがあったんですが、例えばですけれども、今、高齢福祉課と子ども未来課みたいなのに分かれていますが、子ども未来課さんとかが携わっている児童館とかという場所に、ご高齢の方がもっと参画して行って、そこでおしゃべりしていてもいいし、子どもが遊んでいる様子を見ていることもエネルギーをもらえますし、そこで例えばですけれども、入ってきた子どもに、じゃあおしぼりで手を拭いてもらってから入ってくる。じゃあ、そのおしぼりを洗濯して干して、また丸く束ねてもらってとかということ、

じゃあちょっと、もう本当にお安い賃金かもしれないけれども、作業としてどうかとかということも考えていけば、児童館の数だけ人をそこに配置できるかなとか。そういうことももうちょっと分断しないで、北区は結構そこを分断しがちに感じるんですね。なので、そこをもうちょっと役所のほうもちょっと手を携えていただいて、子どもともっと高齢の方が近い関係になっていくといいのかなと、先ほども藤原会長が言ってくださっていましたがけれども、ベーゴマだと男性の高齢者がやっぱり絡みやすいので、男性の高齢者が行きやすい。おしぼりじゃあ、ちょっと男性の高齢者は難しいかもしれないですけども、ものによっては男性の高齢者でも遊びでも、参画しやすいこともありますし、女性の方でももちろん入っていけるのであれば、そういう場面は多いほうがいいにこしたことはないと思うので、そういうところも開拓していただけるとありがたいなと思いました。

以上です。

【会長】

はい。ありがとうございます。

どうぞ、委員、お願いします。

【委員】

ご意見、ありがとうございました。

今のご意見おっしゃるとおりで、横のつながりで、いろいろ先ほど個別会議のお話もそうでしたけど、いろいろな社会資源があって、それをつなげなければいけないとか、ネットワークづくりというのは私たちの仕事でもありますし、ずっと分かっているところもすごくある。ただ、なかなかそれが全体的に見ると、本当にやっぱり浮かび上がってきてしまうというので、こつこつやっている部分というところが現実で、今のお話で本当にぷらっと寄れるような児童館と高齢者というようなお話があって。この間、前回のこの会議のときにおたがいさまネットワーク連絡会を豊島で開催させていただきましたとお話をさせていただいて、その後やっぱりある地域に高齢者のシニアクラブもなく、全く居場所がない町会が三つぐらいあるというのが分かりまして、じゃあ、ちょっとその辺の社協の課のほうと一緒に動かさせていただいて、地域のお寺さんと、あと児童館とかに行ってお話を伺ったら、やっぱり児童館の館長さんも「いや、子どもたちも高齢者との触れ合いはやっぱり求めているよ」と。やっぱり現場サイドの方のお話だと同じような話が出てくるんだなというのを、すごい動いて実感したところなので、

私たちコーディネーターがやっぱり現場に行って、こつこつとそういうつなぎ役もできたらなとは思っています。

【会長】

ありがとうございます。非常によいご意見かと思えます。

多分、こういうものをうまくいくのは一つは場所と、それとコーディネートする人とプログラムといいですかね、その3点セットだと思うんですけど、場はそれぞれご用意いただくとして、人は先ほど言いましたコーディネートするというのが、これも本当にもう世代別に分かれていたりとか、ハンディある人ない人分かれていたり、これはどうしてもこの地域もいわゆる縦割りというので越えられない部分が多いかと思うんですけども、そこが一つの突破口が先ほどの学生さんなんかの間に入ってくると、3世代交流ですよ。やっぱり、それでうまくいっているところなんかも多いようですので、学生さんのそういう児童館に投入して、子どもと高齢者をつなぐというような立場のポジションで入ってもらえるのもいいんじゃないかなと思います。

やっぱり、先ほど委員さんもおっしゃっていましたが、高齢者も子ども世代と関わりたいとか、子ども世代も何か高齢者と関わるといふのを楽しみといいますか、あると思うんですが、やっぱりそこに、その人の技といいますか。単におしゃべりだけでは間が持ちませんし、何かこれはというものを高齢者の方が持っていれば、それでつながれる部分が多いかと思うんですね。多分、先ほどおっしゃいましたベーゴマとか昔遊びにたけているというのもそうでしょうし、私どもがずっと区と一緒に関わらせてもらっている絵本の読み聞かせなんかですと、初めは区の認知症予防ということで入って、卒業したときに人前で絵本で読み聞かせできるようなスキルを身につけると。そうすると、やっぱり自然と保育園ですとか、最近、子育て支援のサークルなんかからも声がかかったりということで、何かというと、単なるおじいちゃん、おばあちゃんの集団ではなくて、この人たちを呼ぶと読み聞かせをしてもらえとか、ベーゴマをしてもらえということで、それぞれの施設ですとか団体からもオファーが来ると思うんですね。

単にやっぱり、そういうこれがあるよといいますか、この得意ですというようなところをもっとそれぞれ高齢者の側も持ってもらって、それをうまくちょっとずつ広めていくなり、マッチングしていくと、多分児童館のほうも単におしゃべりに来てもらうんじゃないで、これをしにきてもらうとか、こういう得意な人に来てもらうような形で、逆に高齢者のほうを一本釣りしてもらえんじゃないかなというように思いましたので、

そういう可能性というところも、あんしんセンターの方がゼロから動くのではなくて、そういう人が地域にいるので、知っておけばキーになるような高齢者の方とつながっておけばその人を介して、じゃあ後はよろしくお願いねという形でいけるんじゃないかなと思いますので、非常にいい、今日ご紹介いただけたのかなと思いました。ありがとうございます。

それでは、ちょっと時間のこともありますので、次の議題に進んでよろしいでしょうか。すみません、私だけしゃべって申し訳ございませんが。

続いて、2の第1層生活支援コーディネーター活動状況報告に関しまして、お願いいたします。

【委員】

では、資料5、ご覧いただきまして、こちらは今画面のほうに、少し5の内容を細分化して映しながらご報告をしたいと思います。

まず、第1層生活支援コーディネーターとして幾つかの活動をしているんですが、まず最初に2層の生活支援コーディネーターに対するヒアリングを行っております。16全地区で行いまして、それから幾つか挙げさせていただいているところです。その辺りからご報告と思います。

まず、一番最初に、2層の方々の課題としてコロナがやっぱり長くなってしまったということで、先ほどから個別の地域包括ケア連絡会のところでも話題に上っていましたが、外出機会がなくなってしまった高齢者に対してアプローチすることが必要だというようなことが2層の方たちの課題として上がってきていて。1層の支援の方向性としては、これまでのものを再開するというよりは、このコロナに併せたような形で、新しい形のものを作れないかというようなことの中で、様々な支援ですとか伴走をしているということで、ちょっと事例を幾つかご紹介いたします。これは、すみません、資料のほうにございますけれども、コロナ禍で止まってしまったサロンに対して、幾つかの取組、主に屋内でやる活動を室内だと感染の危険性があるということなので、特に公園などで行う体操がこの間とても広まっているよと。豊島五丁目。これは五丁目団地の広場ということですかね、あれは。そこで、今、どれくらいのケースですかね。

【委員】

週1。

【委員】

週1で毎回何人ぐらい。

【委員】

50人。

【委員】

50人ぐらい来ているという物すごい規模の。50人がやっているのと、通りがかりの人なんかも何やっているんだろうなんていって見て、自転車でぴゅーと通りがかった人が止まってちょっと一緒に体操して、またぴゅーと自転車で行くとか、事前申込も要らない、名前が分からなくてもいいし、誰だか分からないけれども、参加できるぐらいの非常に敷居の低いような活動がいろんところで今、増殖をしているというようなことなんかがありますと。

二つ目の課題にちょっと移りますと、2層の方の中には包括の圏域の中では割とアプローチができていくエリアとそうじゃないエリアがあると。特に関わりが少なさなエリアにどういうふうにして関わっていったらいいんだろうなんていうようなことの中で、1層としてはなるべくうち現場のところでアプローチしましょうかと。さっきも委員と七丁目のところと一緒に町を歩いてみたりだとか、いろんところで訪問するとき同行したりということをやったりしながらしているんですが、その中でも幾つかの手法なんかがあって今、画面に出ていますけれども、町会の中でも集会所がないようなところについては、区が持っているような社会資源、北区はとてたたくさん区民が使える社会資源が多いものですから、そういったものなどのご紹介をしたりですとか、あるいは活動の中では密にならないように、人数を半分にしてなんていうことをやりながらとか、あとはプログラムの面でいうと、委員もご協力いただいている東京都の理学療法士会さんから、区内の理学療法士の方の派遣を年間数回していただいて、効果的な体操のやり方とか痛みがある人に対する体の動かし方の指導とか、そういったことなんかもやっていただきながらとかという、新しいプログラムなんかもそういうところに働きかけるときに活用させていただいたりなんていうのも進んでいる形です。

三つ目になりますが、地域の新たな担い手の話ですね。これはコロナ前からある課題ですけど、担い手の発掘についてどういうふうにしたらいいのかなというところで、最近先ほどからも出ていますが、学生さんなども大学生だけじゃなくて中高なども、かなり地域に関わっていくようなことを授業の中であったりクラブ活動の中であったり、様々な形で取り組んでくださっているところが多いと。そういうところとコーデ

イネートやマッチングなども進めている形になります。

その次に行きます。2のところですね。

生活支援コーディネーターに対する研修の今年度の実施をさせていただいております。その中でも生活支援コーディネーターの中で社会的孤立の問題なども男性のほうが孤立が多いよなんていう中で、男性のことをどうしようかなんてということですね。特に男性が集まるような集い場、サロンはどうしても女性が集まることが多いということで、これもコロナ前から課題になっているものなどについても、何か考えようということで研修もさせていただいて、今年は長野県のほうで長寿社会開発センターというところがあって、これが各地域ごとに様々な取組をしていて、特に男性中心のいろんな活動の実績があって、オンラインでZ o o mで事例紹介していただいたり、研修をしていただいたり意見交換したりということをやらせていただいて、とても参考になるような取組ができました。この後にも続きそうな、緩いおっさんの会みたいな名前の会が長野にあって、そういうのがたくさんできたらいいな、なんていう話しまでしております。

その次に行きます。

自己評価チェック表の導入ということですが。実は、この生活支援コーディネーターの活動というのは、いわゆる生活支援コーディネーターが何か計画をして、住民を動かすというものではなくて、やはり住民主体の活動というものはある程度寄り添ったり機が熟すのを待ったり、主体形成ができるまでの期間という、あるいは関係形成する期間というのがあって、それが長ければ長いほど今、どういうフェーズにあるかということが分かりにくくなってしまうことがあるので、P D C Aに1回落として今どういうフェーズなんだろうとか、どういう計画を立てた中で今どこにいて何が課題なのかなということを見える化をしようということで、そういうような、チェックシートを作って、今年から導入をして皆さんに取り組んでいただいているところです。こんな活動をさせていただいております。

4番ですね。それと、多様な協議の場づくりの支援もしております。生活支援体制整備事業においては協議体といわれる、住民の方たちが自分の地域の活動を知って、どんな活動をするのかという企画をして、活動のつなげるという協議体というものが必要だというふうに言われているんですが、これがなかなか難しく、地域の方を集めても、じゃあ、すぐ何かの活動につながるかというと、ご意見は出るけれども、活動につながらないなんていうことがあるんですが、今、東京都のほうではあまり肩肘張った会議じ

やなくてもいいよと、いろんな形の協議の場を持って、地域の人たちと話し合いをしたらどうですかということをおっしゃっていて、北区の中でも様々なそういった場づくりのための協議の場みたいなものができているものもありますし、これから生まれそうなものもあるので、こういうところについて立ち上げの支援をしたり、動いているところでいろんな悩みに寄り添ったりしながら活動をさせていただいております。

すみません、時間がないので、あれですが、最後、話題提供として、こういった活動を続けていく中での様々な活動が今、北区の中でも生まれております。生活支援コーディネーターの皆様方が様々な取組をしていて、多分そこでいろいろ課題もあつたりするので、少し工夫の事例と課題みたいなところについて、こんな今、取組がありますよということを現場のほうから報告をしてもらいたいと思いますので、引き続きお願いします。

【委員】

私のほうからは話題提供ということで先ほどからたくさんご意見いただいている徒歩圏内で交流できる居場所というものを今、2層の生活支援コーディネーターの方々が大変ご苦労されて、今すてきな場所をたくさんつくっていらっしゃるんですね。まずは、ちょっとそちらの紹介のほうからさせていただきたいなというふうに思っています。

【委員】

ちょっと資料がなくて画面だけになりますが、すみません。

【委員】

そうですね、ちょっと写真でしたので、ちょっと画面でスクリーンで失礼いたします。

まず、先ほども体操のほうをご紹介させていただきました、小地域で工夫しながらというところで、コロナ禍だったというのがありますけれども、まずはちょっと桐ヶ丘の中央商店街のところをお借りをして、体操を始めたというのは本当に初めてだったかなと思うんですけれども、このような団地のところで四、五十人、今、週に1回体操をやられているところが地域でたくさん増えています。

そして、右のほうは、赤羽北のほうの公園なんですけれども、ちょうど保育園の子どもたちが公園で体操をしていると、お散歩の時間に当たるんですね。なので、そういうところで、「ああ、じゃあラジオ体操だったら一緒にできる」というところで自然とこういうような多世代交流の場というのも今、とても増えているかなというふうに思っております。

そして、地域の方々に本当にご協力をいただいて、そういう徒歩圏内で行けるところがないかといういろんなご相談をさせていただいているんですけども、そんなところで、例えば病院とか特別養護老人ホームさんからもご協力をいただいてという活動もご紹介させていただいています。左のほうの写真が今日いらっしゃる委員も、まさにリハビリ室の前のお庭なんですけれども、ここが草ぼうぼうだった時代に何と委員が自ら鎌を持って草刈りをされていたというふうに聞いていますが、ちょっとそれを地域の方々に開放されて今、すてきなハーブ園になっていますね。リハビリされている方もこのハーブ園を見て「あら、すてきね」なんて声をかけていただいたりということで、病院の中ともちょっと地域交流ができていくなというような事例になっています。このようなすてきなハーブ園を、今はもっとすてきなのがいっぱい植わって、いろんなハーブが様々なものが植わっています。

そして、右のほうは、桐ヶ丘やまぶき荘のほうの、まさに駐車場のほうにある草ぼうぼうの敷地だったんですけども、やまぶき荘の職員の方々に聞くと、「ちょっとこれは物騒だから何とかしたほうがいいんじゃないの」と施設のほうにご意見いただくような、初めは状態だったというふうに聞いていますが、これも地域の方々が「畑にできるんだったら、よし、頑張るぞ」というところで、物すごくきれいにさせていただいて、すごいアフターの写真になっております。今では、こちらのほうで地域の方々がまさにスイカができたり、なすとかいろんなものが写っていますけれども、すてきな農地というふうになっています。団地の方が多い地域になっていますので、やはり皆さん、田舎があって昔は畑をやっていたんだよという方がたくさんいらっしゃるんですね。そういう方々が昔のそういう知識を生かして、活躍していただいたりですとか、あとは実はこの畑、とてもカラスによく食べられてしまうんですよ。そしたら、近くの児童館の子どもたちがかかしを作ってくれたりとかというところで、そういうような本当にふらっと立ち寄れる、皆さんからも見える居場所でやっているの、そんな交流も生まれています。

そして、こちらのほうは、神谷のほうの商店街なんですけれども、こちらのほうがシャッターが閉まっていた写真屋さんなんですけれども、このコロナ禍で活動場所がないというところで、「じゃあ、うちの空き店舗を使ったらどうですか」というところで、地域の方々が閉まっているシャッター街のお店のほうで話をちょっと回してくださったというのがきっかけなんですけれども、コロナ禍でできたサロンということで今、活動

されています。

そして、こちらのほうは赤羽のほうの美容院なんですけれども、認知症サポーター養成講座をきっかけに、まずは美容院の美容師さんたちが認サポの勉強をしていただいた。そして、赤羽の高齢者あんしんセンターの方々が地域のためにちょっといろいろご協力いただけないですかというところで今、ネイル体験とかおしゃべりのすてきなサロンが月1回こちらのほうでも開催されています。

そして、デイサービス、有料老人ホーム高齢者向けのスポーツクラブというふうにあります。施設とかそういう介護保険を使うと、なかなか地域との関係が途切れてしまうというような課題もちょっと出されていますけれども、今そのような有料老人ホームさんとかデイサービスさんのほうも空いている時間、空いている場所のほうをこのような形で貸していただいて、地域の方々と、また入所の方々の交流ができたりですとか、そういうちょっと新たな場所も出来上がっています。

そして、こちらの写真は個人宅という事例をご紹介します。左のほうは、上十条五丁目のほうにあります、本当に個人宅なんですけれども、介護保険のご相談等をあんしんセンターの方々が受けていらっしゃる中で独り暮らしの高齢者が1軒家で暮らしているというところで、とてもおしゃべり好きなんですけど寂しくしていらっしゃる。そして、外に出かけるのにはなかなか大変だというようなところをちょっといろんなお話を重ねながら、今は本当にｽ[♯]の隠れ家という少人数のサロンのほうを開催されています。

そして、右のほうのｼ^ㇿｸ^ㇿハウスなんですけれども、こちらのほうは地域の民生委員さんのほうが空き家のほうを社会福祉協議会のほうに地域活動拠点として今、貸しているという形なんですけど、こちらのほうもコロナ禍の間、なかなかちょっと開けることができなくて大変ではあったんですけども、これから、もともとここはお花屋さんだったというところもあって、サンルームがあるんですね。こちらのほうをちょっと生かせるように、実は今、不登校の中学生の男の子がそのサンルームに縁側があったらますます交流できるんじゃないかというところで、そのような縁側のほうも今、作っていらっしゃいます。

そして、次は、お寺のほうの活動で、お寺もたくさん敷地があるというところでご協力いただいていたたりですとか、あとは、買物の場所というところで今、なかなか買物の場所がないという不便を来しているの方々に対して、何かできないかというのも私たちも

悩んでいるんですけども、赤羽北、あとは今年度は史跡中里貝塚マルシェという形でちょうど京浜東北線と高崎線の間、本当に何も無いエリアなんですけれども、そちらのほうのやっぱりご意見を聞きながら活動も始まっています。

ちょっと時間がなくて早口になってしまいました。申し訳ありませんでした。ちょっと先ほどもいろいろご意見をいただいていたんですけども、こちらのような場所がありましたら、今後ちょっと生活支援コーディネーターのほうに情報をいただければと思ひまして、情報提供をさせていただきました。

以上です。

【会長】

ありがとうございます。本当にもう身近な事例を多数ご紹介していただいて、もっとじっくりお聞きしたかったんですけども、ちょっと時間がもう退場の時間になってしましまして、この続き、また、ぜひ次のおたがいさま創生会議のときにご紹介いただければと思います。ありがとうございます。

それでは、ちょっと残念ながら意見交換のお時間を持つことができなくて、誠に申し訳ございませんが、ただいまから一応おまとめというか、副会長、一言ちょっとご挨拶いただければと思います。

【副会長】

福祉部長でございます。すみません、途中からの参加になってしまいましたんですけど、最後のほう、少しお話を聞かせていただきましたけれども、いろいろな工夫が詰まっていて、この資料の前半のほうもざっと見させていただきましたが、できれば全部聞きたかったなという思いでございます。いろいろな事例を発表していただきまして、本当にありがとうございます。

この会議の目的ですけども、あんしんセンターですとか生活支援コーディネーターの活動、こういったものについて情報を共有して、今後の取組を充実させていくこと、このように捉えております。ようやくコロナ感染症が終わるといふか、感染があることを前提としてコロナ以前の日常が少しずつ戻っているというのが現状だと思いますけれども、福祉の分野におきまして、こういった流れを適用していく必要があるだろうとこのように思っております。

ただ、今言ったとおり、感染症はなくなったわけじゃございませんので、特にこの高齢の方は状況が好転したということでもないんだらうと、感染があるということでは。

なので、区としましては地域包括ケア、そして高齢者施策を進める上では、感染者が減ったとか病床がどうかと、そういう数字のみを根拠に求めて進めるんじゃないくて、まず本日あったような皆様の活動の実態ですとか実情を十分に踏まえること、これを忘れてはいけないと考えてございます。感染自体、今後どうなるかまだ分かりません。あるいは、感染を前提とした日常の中で、皆様と区が共通の認識に立って、取組を進めていく。これが非常に重要だと思っております。

令和5年度においても皆様との連携・協力を軸に、地域包括ケアを推進してまいりたいと、このように考えてございますので、引き続き皆様からの情報の提供ですとかご支援、そしてご助言いただけるようお願いを申し上げます、まとめではないんですけれども、私からの挨拶とさせていただきます。

本日は、本当にありがとうございました。

【会長】

それでは、これもちまして、閉会とさせていただきますと思います。事務局、お願いいたします。

【事務局】

本日はありがとうございました。申し訳ございませんが、この場所は5時までなので、すぐに片づけに入らせていただきます。本当にありがとうございました。